JOV の歴史*

藤澤 延行**

History of Journal of Visualization

Nobuyuki FUJISAWA

1. JOV とは

Journal of Visualization (JOV) は、1998 年に創刊されて以来、「見えないものを見る」という可視化科学に関する最新の情報を発信し続けてきた国際的専門雑誌である。創刊以来、現在までに 8 巻 32 冊 (約 320 編の原著研究論文) をフルカラーでの出版にこだわり続けてきたジャーナルでもある。JOV の国際的専門雑誌としての位置づけから、編集委員の構成は、この分野で国際的に活躍する国内外の研究者で構成されている。このため、JOV は、可視化情報学会の英文論文集というより、独自の国際的専門雑誌という色彩が強い。

2. 編集組織

現在の編集組織は、3 名の Editor in chief, Y. Nakayama, Y. Tanida, T. Kobayashi, Regional editor としては、北米 5 名、アジア 5 名、ヨーロッパ 7 名の著名な研究者、そして、編集を担当する Managing editors 21 名、サポート的役割の Advisory editors 33 名からなる。なお、最もハードな仕事である編集の実務を担当する Managing editors は、主査、副主査各 1 名が 1 つのグループとして論文の査読者選定や編集業務を担当する。また、Editor in chief を中心とした編集委員会は、年 6 ～ 8 回ほど開かれ、きめ細かな役割分担と編集業務の打ち合わせがなされている。

このように一見系統的にも見える JOV の編集体制であるが、発足当時からの変化は大きい。以下では、その歴史の変遷について、筆者の知る範囲で記述することにした。

3. 発足当時 (1998—2001)

JOV の発足は、Y. Nakayama と Y. Tanida が Editor in chief となり、小林敏雄研究室 (当時東大生研) に JOV 本部を置く形でスタートした。ただし、当時は、オーム社が JOV の編集を全面的に協力し、出版費用のサポートをし、また、小林研究室のスタッフも編集作業に協力していたと聞いている。なお、この時期は小林先生を委員長とする PIV 研究会の活発な活動時期でもあり、国

内外の PIV 研究が JOV の招待論文、原著論文として出版された。したがって、この時期は、JOV にとっては順風満帆な時期であったといえる。

4. 過渡期 (2002—2004)

残念ながら、このようなオーム社の協力支援も 2002 年で終了することになり、新たな編集の協力体制を模索した時期がこの時期にあたる。2002 年から 2003 年にかけて、この課題を乗り切るため、岡本、大島、武井、藤澤の 4 人の幹事による編集体制をとり、それを Managing editors がサポートする編集体制がとられた。しかしながら、この時期から、Managing editors の仕事に査読者とのきめ細かな対応や論文校正を含む出版業務 (これまでのオーム社の仕事) が要求されるようになり、Managing editors の新たな役割についての議論と JOV の予算的基盤についての会議が頻繁に行われた。その結果、2004 年以降、査読者対応と論文校正業務は JOV オフィスの門脇さんに依頼する編集体制をとり、Managing editors は、論文収集と査読者選定を中心とした業務に専念できるようになった。一方、予算的基盤の必要性から、投稿論文の有料化と論文集の値上げの両面から検討がなされ、それは 2005 年から実施の運びとなった。また、フルカラー印刷による予算的問題の解決のため、2003 年からジャーナルの印刷製本はすべて韓国で行われるようになった。

5. 現在 (2005 年以降)

このような編集体制の変遷を通して、2005 年以降の JOV は、一般論文に加えてショート論文も出版するようになった。同時に、カバーする研究領域も、従来の可視化研究・コンピュータを用いた情報の可視化に加え、サイエンティフィックアートも含んだ広い意味での可視化研究もそのフィールドに加えられた。また、現在、紙ベースの論文集に加えインターネットを利用したオンラインジャーナル化も計画中であり、さらなる飛躍が期待される。なお、現在のインパクトファクターは 0.279 と報告されているが、更なる上昇が期待される。そのためにも、より多くの会員の皆様からの活発な論文投稿をお待ち申し上げたい。

* 原稿受付 2005 年 11 月 4 日

** 正会員 新潟大学工学部機械システム工学科